

2020年11月15日開催
NPO法人COCONI設立記念フォーラム
@千里金蘭大学 14:00～17:00

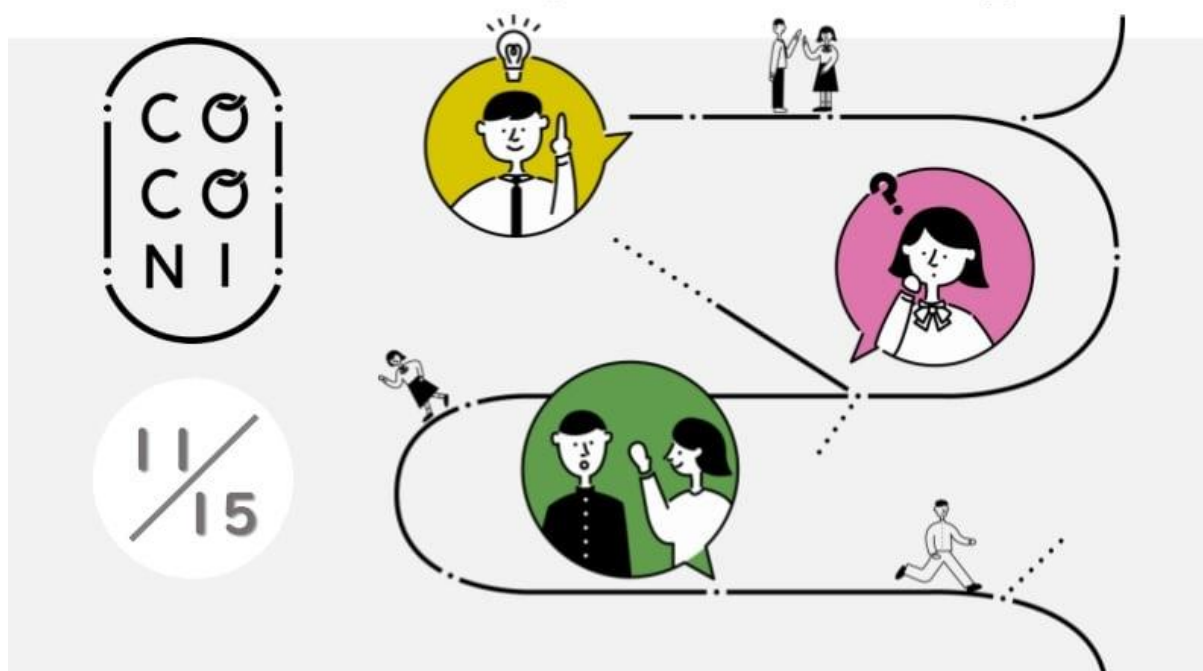
目次

1. 企画概要.....	2
2. 開会の挨拶（水木）.....	4
3. 趣旨説明（谷村）.....	6
4. 学校、NPO, 地域などの連携の事例報告（NPO法人FAIRROAD阪上）.....	7
5. パネルディスカッション.....	12
6. 提言まとめ.....	30
7. フォーラムを終えて（今後に向けての一言）.....	33
資料.....	38

1. 企画概要

NPO法人COCONI 設立記念フォーラム

「すべての子どもたちが 一歩先への希望を持てる社会」へ



テーマ：子どもたちの主体的な進路選択のための連携を考える

日 時：2020年11月15日（日）

14：00～17：00

会 場：千里金蘭大学

3号館9階大会議室

大人は子どもたちに、光ある未来を見せることができるのだろうか？
誰ひとり取り残さないために私たちは何ができるのか、何をすべきなのか。
中学校や高校、地域で子どもの居場所を運営している阪上さんの事例から、
「出会いの場」、「対話の場」の2つの場を、様々な立場の大人で考えます。

子どもたちの主体的な進路選択のための連携とは？

「こどもとおとなが会える場」と「支援者がつながる場」を考えます。

大学で児童教育学を専攻。大阪市内での学習塾経営を経て平成24年にNPO法人FAIRROADを設立。タイ・ミャンマーの現地で難民移民における課題や途上国の教育行政問題に関わる。現在は大阪府内で学校内居場所事業、地域の居場所を運営。予防支援の観点から、潜在化している子ども若者の課題に取り組む。

大阪府立市岡中学校にて、平成5年より市岡中学校で理科教諭として10年間教え、平成15年より教頭として勤務。現在市岡中学校の校長を務める。地域、関係機関との連携により、子どもの多様な学びの提供を目指し、自ら幸せを感じる学校環境創りに挑戦している。



田中 佑典さん



COCONI 阪上 由香さん



西川 孝治さん



中村 香奈さん

大学では教育福祉学を専攻。その後大学院（社会福祉）に進学し現在博士後期課程。大学院進学とともに大東市でSSWを始める（3年目）。家庭教育支援事業とSSW事業についてミクロ～マクロまで包括的に実践。

大学で社会福祉学を専攻。学生時代に小学生から大学生まで多様な年代が集まり、活動するボランティアグループSmileを設立。平成28年に泉佐野市社会福祉協議会へ入職。コミュニティワーカーとして地域住民が運営する高齢者等の居場所づくりや子育てサロンの運営支援に携わる。



COCONI 谷村 綾子
(ファシリテーター)



COCONI 新崎 国広
(ファシリテーター)

子どもたちのために必要な 「2つの“場”」とは？



スケジュール

- 13:30 開場
- 14:00 開会の挨拶
- 14:20 プログラム開始にあたっての主旨説明／千里金蘭大学 谷村 綾子准教授
- 14:25 学校、NPO、地域などの連携の事例報告／NPO法人フェアロード 代表 阪上 由香
学校内居場所からの報告：「子どもたちの声」から
- 14:55 休憩（ご質問、ご意見の付箋をお持ちください）
- 15:05 パネルディスカッション
子どもたちを支える“場”の形をパネラーと共に考えます
- 15:55 まとめ
提言をまとめます
- 16:25 閉会の挨拶
- 16:30 交流タイム
- 17:00 終了

様々な立場の
大人が集まるからこそ
生まれるアイデアが
あると思います！
子ども支援の場を
考えましょう！

2. 開会の挨拶（水木）

みなさんこんにちは。NPO法人共同代表の水木と申します。こんなに紅葉のきれいな日にもかかわらず、お越しいただき本当にありがとうございます。簡単ではありますが、COCONIの説明をさせていただきたいと思います。

私たちはNPO法人として「すべての子どもたちが一歩先への希望を持ち、中学卒業後の一歩先への希望が持てない子どもたち、そんな子どもたちを、身近な大人が繋がることで、伴走できる仕組みを作りたいと考えております。

ここに至るまでの話を少し聞いていただけたらと思います。私は、（15年ほど前の）PTA本部での活動を通して、高齢化が進む中、多世代交流ができていないことに気づき、10年ほど前から、千里ニュータウン、吹田市佐竹台に、「さたけん家」という居場所を作り、学習支援など、子どもの居場所活動を行ってきました。その活動の中で、中学生が“受かるところ”などの限られた進路情報で進路を選ぶことに疑問を持ち、これまでの子ども支援活動でご縁のあったメンバーと、在校生、卒業生の声を集めた『進路選びのヒント～こんな学校あったんだ！』¹という冊子を作ったことがNPO法人COCONIを作るきっかけです。

本日、この会場の皆さまと、“子どもたちのために、何をすべきか”を考える場にしたいと思いますので、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

¹ 2020年にはデータ版を中学校の先生方に無償提供



中学生応援プロジェクト

コロナ禍で進路指導がままならない先生、学校説明会などが縮小になり情報が集めにくい中学生のために、2つのプログラムをご用意いたしました。COCONIができてことで中学校と受験生を応援いたします。

①「進路選びのヒント」データ版の無償提供

大阪府の入学者選抜試験の概要や進学先の種類、先輩の声などを集めた、

「進路選びのヒント」2020年度特別編集データ版を作成しました。

中学校の先生にPowerPointデータを提供いたします。

ご希望の場合は下記の間までご連絡をお願いいたします。

PowerPointデータを送付させていただきます。

※データを加工される場合はご相談ください。



- ・卒業後の進学先
 - ・高等学校の種類
 - ・様々な進学先
 - ・進学費用の話
 - ・入試選抜の仕組み
 - ・先輩インタビュー
- などを17ページにまとめています。



「進路選びのヒント」2018年版は、トヨタ財団の助成金を受託し、大阪府の特色のある公立高校の先生方や在校生・卒業生にインタビューしまとめたものです。

各校の特色や在校生・卒業生から中学生に向けてのメッセージをまとめています。

以下のURL・QRコードからご覧いただけます。

<https://www.toyotafound.or.jp/community/2018/publications/data/2088.pdf>

目次

- さまざまな進学先
- 進学に必要なおかねのはなし
- 入試までのタイムスケジュール
- 入学試験のしくみ
- 大阪府内175校分類表
- 調査高校リスト
- 学校紹介

- ・大阪府立柴島高等学校
- ・大阪府立箕面高等学校
- ・大阪市立咲くやこの花高等学校
- ・大阪市立淀川商業高等学校
- ・大阪府立園芸高等学校
- ・大阪府立茨木工科高等学校
- ・大阪市立工芸高等学校
- ・大阪府立港南造形高等学校

- ・大阪府立農芸高等学校
- ・大阪市立中央高等学校
- ・大阪府立桃谷高等学校
- ・大阪府立春日丘高等学校 定時制
- ・大阪府立茨木工科高等学校 定時制
- ・大阪市立第二工芸高等学校
- ・大阪府立大学工業高等専門学校

3. 趣旨説明（谷村）

近年、子供をめぐって総花的な政策展開が見られます。文部科学省、厚生労働省、内閣府などが学校や子どもをめぐって教育、福祉、子どもの貧困対策に関する政策を次々と打ち出している。そしてそれぞれの政策において、学校や地域の連携・協働が求められている状況です。

しかし様々な政策があれども結局のところ現場は一つ、学校は一つ、教員の体も一つしかありません。多種多様な連携をもとめられても、学校でも地域でも似たようなメンバーがすべてを回しているような状況が生まれているように感じられます。また〇〇支援員や〇〇コーディネーターといった役職がたくさん作られています、一人の方がいくつもの肩書を掛け持ちしているといった状況も見聞きます。

連携が求められ、連携の在り方や内容が多岐にわたるほど、情報が拡散し、余計にコミュニケーションがとりづらくなる状況が発生していたり、また分散した情報を繋いだりすることにさらなる労力が必要となり、支援者が疲弊している状況も見受けられるようです。

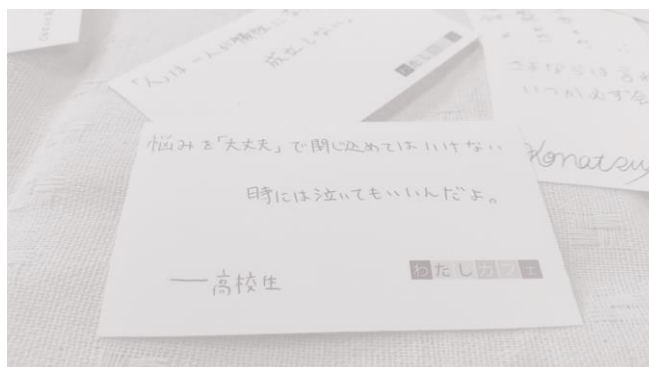
こういった状況の問題はどこに起因するのか、と考えると、例えば学校現場においては、SC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）といった多様な専門性を持つ支援者が、子どもたちに関わって仕事をしており、一口に連携しましょうとって、はいそうですかとはいかない状況があります。専門性が異なる人々は、持っている専門用語も違う。現場対応という限られた時間の中で、相手方の理解できるような内容に変換して話すといった労力を使うことも難しい状況にあるのではないのでしょうか。

要するに、専門性、持っている理論、背景にある哲学、そして個々人がもつ職業倫理、それらが共通でない人々が、お互いの職務を連携させることは、実はそれほど簡単なことではないのだと思います。現場では解決しにくい。お互い相手に遠慮して、立ち入らないような状況が起こってしまったりする。困っている子どもが目の前にいても連携できないという状況すら生まれるかもしれません。

だからこそ、最初の地点に立ち戻って、そもそもの連携の目的や手段を話し合う場が別途必要なのではないか、ということで今回のフォーラムのテーマ、子どもたちのために必要な場について考えるということになりました。

その際、二つの場を想定しているのですが、一つは「子どもと大人が出会う場」、もう一つは「支援者がつながる場」です。本日のフォーラムはまさに支援者がつながる場、ということになるのですが、支援者同士がお互いのニーズを知り、関係を構築するための場について考えよう、ということです、そして、子どもたちのニーズを拾い、社会につなげていく、「子供と大人が出会う場」については、阪上さんのほうから事例をもとに報告をいただきます。

4. 学校、NPO、地域などの連携の事例報告（NPO法人FAIRROAD阪上）



【報告テーマ】

学校内居場所からの報告：「子どもたちの声」から

（1）NPOとして子ども若者の課題に関わる意義

NPOは、人を集め 関係者を増やし 社会関係資本をつなげ 貢献のパワーを動かして、社会課題について代弁しサポートする組織。社会課題の解決は行政も企業もしている。

大事にしているのは「価値創造」ではなくて「役割創造」。関係者一人ひとりの価値と選択の自由をベースに合意形成していくこと（指標の議論）が活動のコア。「サービス提供」的な協働の誘惑や行政の補完を安く請け負うに組織になっていけない。「すべてのこどもたちが一歩先への希望を持てる社会」を目指すためには「NPO」の力が必要。

(2) — 25名の「校内居場所」元利用者みなさんに聞いてみました—

●高校選びの決め手

学力... 8件
学校の授業内容・特徴... 6件
親・兄弟姉妹... 6件 (兄弟姉妹1件)
距離... 4件 (近いから: 3件 遠いから: 1件)
制服... 3件
部活... 2件
先輩・友人... 2件
先生... 2件
進学費用(公立で近いところ)... 2件
校則(ゆるい) ... 1件

「学力」がやはり1位。
その内、「学力のある高校」へ進学した人は
「高校卒業後」を見据えて、通学圏内で上位の
高校を選択していて、
高校の特徴＝仕事にしたいことではなかった。

一方「学びなおしの高校」へ進学した人は、
「学力」で高校を選択していて
進学した高校＝行きたかった高校だったとは
いえないとのことだった。
学力が積める家庭環境や経済状況ではない家庭
が多く、卒業生17名中15名が就職している。
高校見学や体験授業にもっと行きたかったと
いう振り返りとワンセットであがった。

エンパワメントと総合学科の卒業生は
授業内容・特徴と回答しており
高校の特徴を意識して高校進学した人は
学力の低さをポジティブに捉え、在学中も
楽しそうに過ごしていたように思う。



●高校を選ぶために 充実してほしいこと

高校見学・授業体験の充実... 10件
先輩と高校教員の声・対話の場... 5件
対話(相談)の場... 4件
卒業後の進路情報... 4件
進学費用の情報... 2件
卒業生の話(自分の中学の)... 1件

「高校見学・授業体験の充実」が半数以上回答
している。
「先輩と高校教員の声・対話の場」もそこに
含まれるものとなると全員が挙げている。

ネットや情報誌での情報の充実では無く、
自分で実際に見聞きする場が必要とされて
いることがわかる。

「そもそも学校に行かせてるだけでお金が
かかるから苛立たれる進路のはなし。高校見学
だって自由参加って言われたら行きにくい。
自分から進路関係の話を切り出すのが怖い人結
構おと思うで。
高校の情報や進学費用の情報を家の人にもっと
はやくしっかり伝えてあげてほしい。
高校見学も義務にしておいてほしい」と
家庭環境に余裕がなかった卒業生から
これからの進路選択の見直しを
求める声もあがった。



(3) 「こどもとおとなが会う場」



現在NPO法人FAIRROADは高校3校・中学2校で「校内居場所(カフェ)事業」を運営している。「進路選択」に限らず何かを選択するときには「自分の価値基準」が必要。服を買う時、家を買う時、職業を選ぶ時、高校を選ぶ時、自分の価値基準がどれだけはっきりと見えるようになるかがその後を大きく左右する。「自分の価値基準」は「体験・経験・そこに紐づいた感情」によって作られていく。

生きづらさを抱える子ども若者たちは、「他者(親や先生)の機嫌や顔色をうかがったり、価値観の押しつけ」の中で育っていることが多く、フェアな関係が成立しない場では他人の価値基準で選択してしまう。価値観は「自分の価値基準で判断すること」を重ねないと得られない。その「自分の価値基準」で判断したり考える場が、「こどもとおとなが会う場」でもあることは、世代を超えた多様な価値とのフェアな出会いによって得られる子ども若者の利益はもちろん、そこに关わるおとなたちと社会へ声を届けることができる。

(4) 「支援者がつながる場」

「支援」という言葉が先立つほど「支援される側」と「支援する側」となり、フェアな関係が保たれなくなるので、そもそも「支援者」という意識を捨てなければならないかもしれない。「支援している」から、同じ力の分だけ応えてほしい、変わってほしい。支援後の理想と現実のギャップに対する苛立ちと焦りが子ども若者にのしかかる。生きやすい幸せな生活を当事者が送るために「支援者」は全力を尽くすが、結局なにが幸せかは本人しかわからない。

当事者の価値基準に耳を傾ける柔軟さを持つためにも、「支援」と「支援者」も孤立してはならない。彼らがこれからの社会で生きていくためには、「開かれた関わり(支援)」の中に当事者も支援者もいる必要がある。「当事者の生きやすい幸せな生活」という同じ目的を持つ支援者同士がそれぞれの活動とそのエピソードを分かち合う場を持つことが、その一歩ではないだろうか。その繰り返しが「こどもとおとなが会う場」をシンボル化させ、支援者も幸せにするはず。

(5) 「アドボカシーに必要なこと」

当事者の声を聞き、支援者同士のつながりをつくる。そこに集うひとたちの声をもとにアドボカシーやロビー活動を行っていくこともNPOの役割のひとつ。アドボカシーは3者以上で、自分(自団体)の意見を優先しないフェアな関係であることが必要。行政や地域に過剰な信頼と期待をすることはフェアではない。わたしはそれをしてしまっていて本当にうまくいかなかった。フェアな関係の中で、困っている状況を知らせ、自分の役割とできることを共有する。

自分と他者の貢献できることと役割を明確に理解することがアドボカシーとロビー活動の基本。これが見えてこれば「他力本願」でポジティブにそれぞれが動き出す。「こどもとおとなが会う場」と「支援者がつながる場」を作って、そこでの困りごとや声をアドボカシー・ロビー活動へとつなげていく。

進路選択というキーワードでこれらを行っていきたい。

5. パネルディスカッション

こどもとおとなが会合う場と支援者がつながる場を考える

子どもたちのために必要な「2つの“場”」とは？

登壇者：阪上 由香 （NPO法人FAIRRRORD 代表／NPO法人COCONI）

西川 孝治 （大阪市立市岡中学校 校長）

中村 香奈 （泉佐野市社会福祉協議会 コミュニティーワーカー）

田中 佑典 （大東市教育委員会 ソーシャルスクールワーカー）

ファシリテーター：新崎 国広 （大阪教育大学 教授／NPO法人COCONI）

谷村 綾子 （千里金蘭大学 准教授／NPO法人COCONI）

谷村：登壇者の方には自己紹介も兼ねまして、阪上さんの報告をお聞きになった感想や、ご自分の視点ではこういうふうに考えますとか、こういうこともありますとか、ありましたら。基本的には坂上さんへの感想ということで簡単にお話しいただければと思います。田中さんからお願いします。

田中：大東市教育委員会からまいりました田中佑典と申します。よろしくお願いします。僕は週4回の勤務であって、小学校に週1回ずつ2校配置されるという形で活動しております。よろしくお願いします。僕がお話を聞きながらとても重要だなあと思ったことは、子どもが自分自身の最善の利益のために、自分の価値基準というか価値観みたいなものを作っていくことと、あとそれを対等性のある相手と交換しながら新たに自分の意見を作り出していくことがとても大事で、そういった場が必要なんだろうなあって思いました。ただその力、自分の価値観であったりといったものを学校の先生がたくさんつけてくださっていると思うんですけども、それを適切に発揮できるような環境っていうのがなかなか制度上であったりとか、子どもの環境上においてなかなかないんじゃないかなあと思っていて、せっかく学校の先生が力をつけてくださっているのにもかかわらず、それが適切に発揮できない環境っていうのをどういうふうに考えていくべきなのかっていうのがスクールソーシャルワーカーとして、とても疑問になりました。以上です。

中村：泉佐野市社会福祉協議会から来ました中村香奈と申します。仕事はコミュニティーワーカーと言いまして、主に地域づくりをさせていただいております。ボランティアさんであったりとか、地域の活動者の方と一緒に、地域での活動を作っていくというような仕事をしています。その中で、地域住民さんが運営する高齢者の方向けの居場所であったりとか、子育てサロンですね、乳幼児の子どもたちがお母さんたちと一緒に来る子育てサロンとかの運営支援っていうものを行っております。阪上さんの発表を聞かせていただきまして、すごい重要なあと思った点が、支援者が孤立しないようにつながっていく場を作っているというところなんです。やっぱり私たちも多様な団体さんたちと一緒に仕事をする機会が多いので、そういったところで各々の立場が違うんですけども、各々の考えとかを共有しながら一緒に連携していけるような場っていうのも作っていく必要があるなと感じました。また卒業後の居場所、地域の間所っておっしゃってたんですけども、やっぱり子どもたちが安心して自分の思いとかを言えるっていうところで、今後地域っていうこと、すごい重要なと思います。地域支援をやっている人間として、やっぱりここをしっかりと考えていかなければいけないというふうに感じました。ありがとうございます。

西川：みなさん、改めましてこんにちは。大阪市の港区にございます、大阪立市岡中学校で校長をさせてもらっています。市岡中学校では5年目ということでですね、現在も校長職として子どもたちの日々の様子を見させてもらっています。阪上さんの発表にもありましたように、市岡中学校では2年前から居場所を作らせてもらいまして、高校の居場所カフェとは説明にも重複してしまうのですが、カフェっていうものを通して、子どもたちのちょっと一息、居場所として学校内に設置しているものとは少し堅苦しいものにはなっていますが、ナナメの関係、教員ではない、親でもない近所のおっちゃんおばちゃん、お兄ちゃんお姉ちゃんが学校の中にいて、子どもたちがいろんなことに煮詰まった時に、ふと自分に返れる、そういう場所を提供しながら、子どもたちの多様な学びですね、まあコロナの関係で特に如実に現れてきたなという感じ、学びの多様性っていうのを含めながらですね、子どもたちのより良い成長に向けて、なおいろんな支援者の方とつながりながら、つながる場所として学校というのを提供しながら、我々も参画しているというような状況でございます。阪上さんの話の中でですね、学校の役割として特にそうだなあと思えたのは、経験を積み重ねる、これが自己判断、自己基準の形成につながっていくという話があったと思うんですけど、はたして学校で本当にこの経験を積み重ねている、その経験が子どもたちの個性、自主性を伸ばしている、伸ばしている活動になっているのかっていうことを今一度検証していくべきではないかなと感じております。今日はいろんな方々と交流を持ち、そして学校現場により良い息吹、新しい風をですね、吹かすことができたかなあというふうに思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

新崎：コメンテーターといいますか、ちょっと新崎の立場性をお話しした上で、お話しする方がいかなあと思いますので、ちょっと聞いていただけたらと思います。今は大阪教育大学というところで教員をしています。ただ、僕は教員免許を持っていない大学の教員です。まず現場、大学を卒業してから21年間、障がい児のワーカーとして、個別支援、グループワーク活動、地域づくりっていうものに関わってきました。その中で、やはり阪上さんがお話しされた経験というところが剥奪されている子どもたちっ

てというのが非常に大きな課題でした。それが大学の教員になり、そして教育という立場から福祉を見ていく、双方の壁それから双方の狭間ということの大きさに、非常にジレンマを感じ、なんとかそれを協働できないかといことを、今模索しているという立場で、今日はコメンテーターをさせていただきたいと思います。単に大学の教員としてとか、教育の立場からではなく、その二つの壁の中でのジレンマを抱えながらという立場で、今日はちょっとコメントさせていただいたり、いろいろな課題提供をさせていただくという形にしたいと思っています。よろしくお願いします。

谷村：ありがとうございます。私は本学の大学教員なんですけれども、教育行政が専門でして、教育の内容、方法論とかっていうよりかは、制度やシステムっていうところで、いろんなことを考えていけたらなと思っています。この間、居場所の阪上さんとかとのつながりを得まして、地域との協働とか連携で、これからの学校が本当にいろんな人と、人だけではなくいろんな組織と協働していかなければ立ち行かないし、そうすることでお互いが良い関係になれるのではないかと、その先生がしんどくなってしまうような教育改革ではなくて、必要な資源が必要なところで、得意なことは得意な人がするっていうようなそういう考え方のもとで、さっき西川先生がおっしゃったような、子どもがそうであればいいじゃないかという視点でものを見て、お互いのその領域を超えてでもそこを確認してつながっていけるような教育改革が求められているのではないかなと。そこには素人的な目線があってもいいし、専門的な目線もあっていいっていうことで、私たちもどちらかというところでは何かの専門でかたまっているわけではないので、素人的な会話もしているんですけれども、やはり教育に関してこれだけ熱く真剣に語れる場っていうのはできると思いますので、日本の社会でもそういうところももっと情勢していければいいのではないかなと最近思っていたりします。

谷村：パネルディスカッションは、とりあえず2軸でいこうかなと思います。それぞれが考えている、困っている子ども像、私たち、みなさんもですけれども、困ったなって思ったり、こんな子困っているっていうイメージがあると思うんですが、それぞれが自分たちの枠の中で考えているので、それをつながることで同じ子についていろんな知見を共有して、「あ、そうだな」みたいな感じで発見につなげていけるといいんじゃないかなというふうに思っております。簡単に自己紹介をしていただいたので、もう1ターン、それぞれが見ていらっしゃる、困っている子どもってこんなことがあると思うっていうことをお知らせいただいてから次に入りましょうか。それでもよろしいでしょうか。

田中：どんな子が？

谷村：自分が関わっている中で、困っている子どもって、学校の先生は学校の先生で、地域の方は地域の方で、専門職の方は専門職の方で、私たちはこういうニーズに対応しているというような考えとか、こんな方に実際こんな対応していますとか、こういう相談が多いですとかあるかなあと思うんです。そこを共有しておいた方がズレないかなという気がするのですけれども。どうでしょうか、話しにくいですかね。

西川：では、最初口火を切らせていただきます。学校現場ですすね、まさに先週あった話なんですけれども、3年生の進路懇談中、今どこの学校もこの時期三者で、生徒と親と

担任と、場合によっては進路担当も入って三者で懇談をし、今後の中学校卒業した後、どんなふうにして、まあ簡単に言えば進路考えているのかっていう具体的な話の最初なんですけれども、そこでですね、こんな親御さんがおられました。「私は大阪の府立高校で、何も学ぶことがなかった、それが故に私は大阪に府立高校を否定しています。したがって我が子には私学専願で、関関同立以上を狙える、そういう学校が目指せる私学に行かせます。もしそれが叶わなければ、大阪以外の公立の学校を選択します。とにかく府立、公立には入れません。」ということですね、子どもを目の前にして親が自分の子どもの進路をそのように決めている、まあ全く子ども任せの親もいればですね、もうレールを敷いている、子どもには有無を言わずという、そんな親御さんがおられまして。まあ話が長くなるんで、それを、いや子ども本意で考えないといけませんよっていうのをですね、いろんな引き出しを紐解きながら親御さんには説明し、ある一定の理解は得たということで、まあ一人一人ですね、子どもの進路を考える時に、進路選択、いろんな考え方がもちろんあるんですが、もう親主導でしているところがあります、結構あるのかな、これは見えない、見えない部分があって結局は自主的な判断ができないままに、実際にはまだ一波乱、二波乱あると思うんですが、学校でこう本当に生々しい、困っている事例として、そういうこともあります。

新崎：ありがとうございます。実はCOCOONIのひとつのミッションとして、中学校から高校へ進学する際に、今までいわば偏差値の輪切りというと厳しいかもしれませんが、本当に例えば厳しい学力の中で、進路をしっかりと選ぶことが必要な子どもたちが進路を選べてないんじゃないかということも、とても大きな課題でした。いわゆる「あなたの偏差値がここだから、この学校がいい」っていう、その一人一人の状況に合わせた進路指導ができていないんじゃないかっていうこともCOCOONIの立ち上げの大きなひとつポイントという形で、まさに今西川さんがお話しされた部分、その進路っていうところがポイントかなあと思ったんで。

谷村：ありがとうございました。COCOONIのミッションとして中学生の進路選択支援という契機にいろんな問題が本当に関わってきていると考えます。進路が選べないというところに現れる様々な複合的な課題と阪上さんがやっているような課題とはかなり共通する部分がありますので、だからこそこういう場で一度ちゃんと考えたいということです。西川先生、その親がレールを引くというところについては、何かそういったその情報が、親御さんがちゃんと情報をわかっていてやっているのか、あまり情報がないからそういうことになっているのか、どちらかと思われますか。

西川：情報はね、その親御さんはかなり調べてはりますね。まあその自分の価値基準で考えているっていうのがやっぱり厳しいかなと。

谷村：なるほど。じゃあ情報は古くなっているけど固執しているというわけではなく、逆にいろいろ知っているからってことですかね。わかりました。ありがとうございます。社協とか福祉、地域の方面から見てどうですかね。

中村：困っている子ども像なんですけれども、直接そんなに子どもと関わるってことは少ないんですけど、学校の先生とお話ししていく中で、福祉教育とか一緒にさせていただ

く中で、先生からお聞きするお声として、困っているお友達がいても、あんまりこう声をかけるっていうのがなかったりするんですよね、ちょっと周りを見れるような子になって欲しいなとか、そういう人を思いやれる気持ちとかもちょっと伝えたいんですけどっていうのをよくお聞きするので、そういったところなのかなっていうふうに思います。またそこから地域の方とお話ししていく中で、ちょっと悲しいなあと思ったのが、地域のボランティアさん、民生委員さん含めなんですけれども、登下校の見守りとか結構やってくださっているんですけど、なかなか挨拶が帰ってこないなとか、親御さんもそうなんですけれども、なかなかコミュニケーションが難しいなあとというお声を聞くので、やっぱりこうその地域に住んでいる生活者としての子どもであったりとか、お父さんお母さんっていう視点っていうのが、ちょっと減少、少なくなって地域の人も悲しいかなというお声を聞くので。ちょっと違うかもしれないんですけど、困っているという意見としてはそんな感じです。

谷村：はい、ありがとうございます。さっき打ち合わせの時、地域のつながりがないので、それを取り戻さないというお話をされていたかと思うんですけども、そういうところにやっぱりこう現れているというか、お互いよそよそしい関係で、自己責任と言いますか、みんなで助け合うみたいな気持ちがなかなか持ちにくいっていう現場になっているってことですかね。

中村：まあ、そうですね。いろんな世代が集まる場っていうのが、やっぱり少ないのかなあっていうのはあります。高齢者向けの居場所とか結構広がったりするんですけど、共生型サロンっていうって、いろんな年代の方がいつ来てもいいよっていう居場所も広げていってるんですが、そういった活動を通して子どもたちにも来てほしいなあって思いますし、いろんな立場の人がそこで顔見知りになることができれば、そういった悲しいなあって思うことも減っていくのかなっていうのはあるので、やっぱり顔の見える関係っていうのを地域で作っていけるようにっていうのは思っているところですね。

谷村：ありがとうございます。地域で顔の見える関係っていうのは、居場所で阪上さんが地域でされているようなことともつながっていったって、これが全体的にそういう話につながっていくのかなっていう気がしますけれども。阪上さん、何か補足したいことありますか。

阪上：ありがとうございます。結局、地域の居場所で今、いそじ地域と西成でやってますけど、いそじは中学校内居場所と特に連携を意識して進めているんですけど、やっぱり役割の創造ってすごく大事で、どんなステージで関われるかっていうのをすごく明確にしたら結構な人がやっぱり集まってきて、今では、今はコロナでこんなんですけど、コロナじゃない時は平均多かったら20人くらい来てるんですよ、大人が。で、子どもは半分くらいのおきもありましたし、クリスマス会の時とかは、呼び掛ければめっちゃめっちゃ来てしまって、そういうのに慣れていないから結局、たくさん来すぎてご飯が足らなかったり、ハプニング的なことはやっぱり怖い、慣れない。なので、申込制にしてほしいとか、そうふうなことを協議し合いながら、今はコロナに突入したので、QRコードで参加申し込みを受け付けて、校内でチラシを配ってもらって、こ

ういったところ、今困っていますとか、こういうの求めていますとかははっきりさせる。どう困っているかをはっきりさせるっていうのがすごく大事なポイントやなあと思って。そうだし出してからすごく動きました。なので、割と地域の人たちはしたいと思っていて、お節介な人たちはすごく多いので、なんかこう、ふれあい喫茶でも給仕係じゃないですけど、デコレーションとか、季節に合わせたかざりを作るとか、役割を創造するっていうのは大事なあとつくづくやりながら思っていて。ふれあい喫茶とかって、なんかこう入る隙間ってあるんですかね、中村さん。ああいうサロン、もうすでにあるもので。

中村：そうですね、対象が決まっているサロンっていうのが結構あるので、そこはちょっとあれかもしれないんですけど、まあ地域に住んでいる人やったら誰でも来ていいよとかいうような居場所も広がってきているので、そういったところでしたら、やっぱり子どもたちにも来てほしいなあと思ってはる地域の方もいらっしゃるの、そこでこうね、阪上さんみたいな方と一緒に手を組むことで新たな層をキャッチできたりとかっていうのができたら面白いなあというのは聞いていて思いました。

谷村：はい、ありがとうございます。お互い聞きたいところがあれば、いくらでも聞いてください。ではすみません田中さん、後回しにしてしまったんですけど、スクールソーシャルワーカーという、きっとみなさんすごく興味のある職かなと思うんですけど、その視点から少しお話をしていただけますでしょうか。

田中：どんなケースがあるかなと今ちょっとここで考えていたんですけど、ちょうど地域の居場所がすごい大事だったなっていうケースがここ最近あったなあっていうのを思い出して、ちょっとだけそのお話をぼやかしながら喋りたいなあと思います。小学校の6年生くらいの時にお母さんが亡くなってしまって、地域の子ども食堂にお父さんとその子と3人で行って、お父さんがそこにいる地域の皆さんに、うちはこういうふうな家庭で、こんなことに困っていますっていう話をしておられた。その子は今、中学校3年生なんですけど、このコロナになって父子家庭で、宅配の給食のサービス、ワタミさんとかがやっているご飯の配食をしているサービスを使っているから、子ども食堂に行くのをやめてくれっていうふうにお父さんが中3の子どもに言った。で、中3の子は、すごく居場所として感じていたんですけども行かなくなって、その間に進路相談があって自分なりに進路をすごい考えた、お金がない中で自分が行けそうな学力で、自分のやりたいことをと思って、その上でお父さんとおばあちゃんに相談した。けれど、どっちからともやめなさいと言われてしまった。で、相談する先がなくなってしまって、そして自殺企図を起こしたというケースがあって。もしかしたら子ども食堂に近いうちにいれば、そこでもっといろんなことが話せて、気持ちを落ち着かせた上で、次は自分の進路をどうやって考えていくかをまたそこでもう一回話し合えたと思うんですけども、その機会が奪われてしまったので、すごい極端な行動に出てしまったっていうケースがあって。地域の力って言うところすごいボヤボヤしていて、いっぱいあるなと思うんですけど、そう言う意味でも居場所っていう場所と自分の気持ちを喋れる場所ってすごい大事ななとこのケースでは思っています。今その支援、これからどうしようかなってまだまだ考えているところで、その子ども食堂さんともどういうふうな連携、お互いの役割と限界を知った上で、どんいうふう

な、新たな役割っていうのを作っていきけるかっていうのはすごい大事だなって思いながら、支援方法を考えている途中ではあるんですけど、そういったケースがありました。以上です。

新崎：ありがとうございます。あの、阪上さん、居場所っていう話がずっと出てくるんですけど、阪上さんが考えるでいいんですけど、居場所ってどんな場所？さっき、一つは多様な考え方とかを承認し合える場っていうのは言ってはったじゃないですか。阪上さんがいう居場所、それに対してまた皆さんも居場所っていうところのイメージもあると思うんですね。その辺ちょっと共有しながら、次の段階に進んでいったら面白いかなと思って。

阪上：なるほど、居場所ですね。まあけど居場所事業としてやっているのは、その理由が固定されない場で、理由が固定されない対話の場としての居場所であったり、そこには居心地であったりとか、その中で価値基準が育つ場、養われる場ってような感覚は、言葉にするならあります。なので進路指導する時もあれば、5分後には家の相談にのっている時もあれば、帰り際に恋愛相談していたり、っていう理由に縛られないことで、やっぱりその仕掛けとして、最近ちょっと話ズレますけど、ゲームをね、中学校内居場所はカフェではないので、ウノとかカードゲーム、ボードゲームとかおいているんですけど、あれってその会話を重ねることが慣れていない子たちって、その輪にいることができなくて、人の基準を聞いたりとか、自分の基準を元に話していたりとかっていうことに慣れていないから、ウノとかしながらだったら、まずは輪の中に入れるか、こうカードゲームをするところ、しながら話すことができるようになってきて。ツール、仕掛けは大事なんですけど、結果として対話、理由にひかれない対話の場が居場所なのかなって。そこで育つものとか得られるものとかが価値基準だったりするかなとは思っています。

新崎：なるほど。学校やったら勉強する場所とか、なんかこう役割が決まっているんですけど、そこはその役割を決めるんじゃないくて、そこでほっとできたり、自分の意見が話せたり、承認されたりできる安心とか安全を提供できる場ってみたいな感じかな。

阪上：そうそう、主体的であれる場。

新崎：1人質問があるんですけど、オンラインゲームはあり？って書いてある。オンラインゲームで人とつながる、不登校の高校生。オンラインゲームばかりをする子どもに不満の親、オンラインゲームはあり？なし？

阪上：なるほど、オンラインゲーム…

新崎：聞いてみる？フロアに。

阪上：そうですね。

新崎：質問した人、ちょっとだけ短く。ごめんね、暴走して。（笑）

質問者：私に関わったケースではあるんですけど、このコロナで、きっかけというかそれを境に高校に行かなくなって、家にずっといてて親はそれを心配している。最初、携帯を取り上げてもらっての殻になって、全然喋らないし、初めて会った時ももう、気持ちここにあらずみたいな。そこから携帯を渡したら、もともとやっていたオンラインゲームを通じて、人とつながりを持って、本人は2回目、初めて会った時よりも元気をかなり取り戻して。ただ、そこになんか依存していて、昼夜問わずしているという状況で親も心配している。それはちょっとどうなのかなと。

新崎：なるほど、ありがとうございます。

西川：学校という立場でですね、阪上が話せえということなんでね。ありかなしかで言えば、僕はありかと思うんですよ。そこでですね、昨日でしたかね、Eスポーツっていう新たな分野があるかと思うんですけど、そこで学校がすすめているEスポーツのシステムの中に、健康管理をする、まあ時間管理も含めて、まあいろんな管理をしながらですね、健全にしていくための材料を提供していくっていうのがあったと思うんですけど、その部分がアリでありながらも、今の状況っていうのが健康的にどうだったのかっていうのはすすめていく手立てにはなっていくのかなと。まあこれから、学校がオンラインゲーム、中学校でも実際にコロナの関係で増えて、学校に行かないと、行く理由も見出せないという一つの理由づけをしながらゲームに没頭している子がいます。その家庭は本当に困っておられます。そこからですね、そのEスポーツでカバーしているようなシステムっていうのがひとつ指針になるのかなと。これからのことなんでね。具体的な答えになっていないかなと思うんですけど。これからの課題として、健康管理っていう面をしっかりと出すと。しながら、それを継続するっていうのもありかなと。

谷村：ありがとうございます。オンラインゲームはされるんですか。あ、しないですね。される方いますか？あ、阪上さんもしないんですね。

阪上：あ、してますよ。ネットゲームは当時めちゃくちゃしてて。コンチェルトゲートとか知ってますかね。ちょっとね、そういうゲームしてたんですけど、海外の方とつながったりとか、自分の基準がある程度しっかりしていれば、私はそれでめちゃめちゃ英語力が伸びたと思います。チャットすごいスピードでするので、中国の方とかかな。そういうのとか、フックとしては広がるし、それはね、自分の価値基準が定まっていれば、うまく使いこなせますけど、これじゃなかった時に、よく学校内現場でも、なんかソーシャルネットワークで知り合った人と付き合った、もめた、別れたとか、またソーシャルネットワークの中で付き合ったって、対面する力、対話力っていうのが育ってないから、それで一喜一憂してしまって、表情も見えない、表情に追いつけない。それは、フックとしてはいいけど、ちょっとこう、年齢にもよるのかな、どうなんかな、対話とセットであってほしいですね。

谷村：そうですね。なんだろう、ゲームって楽しいし、世界広がるし、っていうのはよくわかるんですよ。引きこもりになることの怖さももちろんよくわかるんです。私が大学関係で、子ども向けのイベントをやった時に、キッズシティ吹田っていう、子どもたちが自分でお店を考えてお金を発行して、銀行とかやって、みんなで一日お店で買い

物したり、仕事をしたりして楽しむってイベントをやったんですけれども、近隣の小学生が来てくれてやってたんですね。その時に、この言葉が本当に嬉しかったっていうのが「なんや、ゲームよりおもしろい！」って言ってくれた男の子がいて、めちゃめちゃ嬉しかったんですけど。やっぱりゲームはゲームで楽しくていいと思うんですけど、そうじゃない場がない時、物凄い吸引力がありますし、全部持っていられる感があるので、そこは他の場がちゃんとあるっていうことをしっかり考えて、これもおもしろいかもしれないけど、これ以外にもおもしろいことってあるっていうことを知った状況にしていけないとあかん、それが責任なんかなあっていう気が私はしています。

新崎：まあ僕も同感ですね。禁止するところからは何か生まれないなって気がするんです。僕もワーカーしてた時にね、1番よくなかったなって思うのは、まあ僕はあまりしなかったんですけど、自分で考えなさいとか、自分で決めなさいって言えばいうほど依存的になる、悪い意味での依存的になる。つまり、その怒っている先生が支援者のいわゆる価値観に合わせてしまうというふうなことが、すごく実感しています。それとあとは、やっぱりおもしろって今ね、谷村さんもお話しされたみたいに、おもしろい経験っていうのを、どれだけできるか。逆にいうとね、今、経験というところから剥奪されている人たちがたくさんいるなっていう気がして、それは僕が出会ったときは障がいがある子どもたちやったんですけど、経済的に厳しい状態であったり、保護者からネグレクトっていうか信頼を得られていない子どもたち出あったり、逆にいうとそのことが困っている子っていうところに戻すとね、困ったって思ってくれる子はまだ、親もそうなんですけど、まだ次の段階を一緒に考えられるんですけど、そのことが当たり前になって、困っていないっていう、問題意識がないっていうのかな、その時が多分一番すごくしんどいんやろうなって気はするんです。ですから、先生にとって地域の人にとって支援者にとってそれぞれの、先ほどの阪上さんのお話でいうと価値基準の中で、なんかこう自分の困り感とかがあったり、まあ別にこの状態で当たり前じゃないって思ってしまうところの中で、どう関わっていくのかっていうときの、なんか提案していくっていうことの難しさと面白さっていうのが多分出てくるんやろうなあってその辺はどうですか阪上さん、誰に降ったらいいと思う？

阪上：中村さんと田中さんに居場所の定義を。

新崎：中村さんと田中さんに居場所っていうのをどんなふうを感じるかっていう定義をしてほしいと思います。

中村：居場所なんですけど、私は人と人がつながりを作る場が居場所かなあっていうふうに思います。まあ、顔が見える関係が一番いいとは思いますが、そこがその人にとってよりどころになったりとか、行ってよかったなとか、そこでまた出会えた人同士がつながったりとか、っていうのが居場所かなって思います。あとまあ、そこで安否確認とかもできると、それって結構高齢者の視点だったりするんですけど、安否確認とかできると、今の社会情勢的にもいいなあっていうふうに思っているんで、私はそんなふうに思います。

新崎：はい、田中さん、いかがですか。

田中：そうですね、とても難しいなあって今思っているんですけど、居場所っていうあれに入るかどうか分からないんですけど、自分自身がいたい場所っていうか、素を出せるっていうか、自分自身をさらけ出しても構わないなと思える場所、気のおけないような場所っていうのがすごい大事かなって思っていて、そういう場所だったらいつまでいてもいいなあとも思うし、それこそ目的がない状況であって、いたいと思えるっていうような場所が居場所になるんじゃないかなっていうふうに思いました。

阪上：その、なんもせんでもおれる場所っていうのは大前提にあるなって思っています。だから、よくあるのが、その居場所で外部講師とかゲストを呼んだ時に、「せっかく来てはるねんから参加しいや」とか、「来てくれてはるねんから遅刻せんように来な」とか、そういうのが伴う場所っていうのは、なかなか居場所としては成立していないんじゃないかなと私は思っています。だから、学校の中ってそもそも成長とか教育の論理が働くので、そもそもいること自体では許されないんですけども、そういうそれを超えられる場所っていうのが学校の中にあることが登校動機になり、午後から授業を頑張れるエネルギーになり、っていうのが生活の中で本来リセット、家に帰ってリセットされて、おかあさんに話を聞いてもらって、お父さんが質問してきて、まあゲームばかりしてるんちゃうでっていうコミュニケーションがあって、明日からまた朝起きていくわけで、というそのワンクッションっていうのが家におるだけでは許されないっていうご家庭もたくさんあって、家帰ったら弟の面倒みなあかん、何々しなあかん、バイト行かなあかん、家の掃除せなあかん、洗い物せなあかん、って結構忙しい子たちって結構しんどい子たちに多い特徴、傾向だったりするんです。家がゴミだらけやから勉強スペースがなくて、だから勉強も伸びない、学校行ったら疲れてるから寝てもうて、お母さんも朝寝てるから自分も遅刻してもうて起きられへんくて、っていうのがすごく多いので、やっぱりなんもせんでおられる、いれる場所って、評価されない指導されない場所っていうのを学校の中に作るっていうのはすごく重要で、だから頑張って居場所のある日には学校来るっていう子がいます。

新崎：ちょっとだけいい？ すいません喋りすぎやね。実はあの、大学の教員の仕事として高校訪問とかに行っているんですよ。名前は出さないんですが、大阪府内でトップレベルの学校に行って、それで授業してくれって言われたんで、子どもの貧困っていうテーマで話をした時に、その彼ら彼女らに聞いたんですよ、学校に居場所を作る意味っていうのを彼らは持っていないんです。つまり、学校に来て授業受けたら成績もすごく優秀なので、そこにいることがすごく快適やし、だから特に居場所って必要ない、無理に設定せなあかんっていう必要がないっていうことで、ポカーンとしているんですよ、その学校の中に居場所を作るっていうことの意義を説明した時に。あ、まあCOCONIの存在意義って逆にいうとそういうところかなあって。僕はある意味、居場所って一つは承認欲求が満たされる場所、自分があなたは別にそこにいるだけで大切なんだよっていうことを承認できる場所っていうのが作れていない状況、環境、まあ阪上さんのところでいうとね、そういう子どもたちやご家庭に対してどんな協働ができるのか、っていうのが多分COCONIのミッションの一つかなっていう気がしてたんでね、それでちょっと居場所っていうのについて質問してみたんです。

谷村：はい、ありがとうございます。学校の先生を批判するわけではないんですが、学校の先生はやっぱり学校が好きとか、学校で成果がよくて、学校の先生になっている方々かなと思うので、学校が居場所であるっていうことに確かに疑いを持つことが難しいのかなと今のお話を聞いて思いました。学校といえば承認の場ではないというところの共通理解が学校の居場所に関してとか、子どもの居心地の悪さがある場合に関しては、そういう共通理解を職種を超えて持つことっていうことがひとつ課題になってくるのかなとか、地域は地域でご家庭が自分の居場所、承認の場所になっているかなってないかをきちんと丁寧に専門職が、専門性が違っても、そこは押さえましょうとか、なんかそういうふうなことをするだけでもちょっともしかすると話の仕方、しやすさが変わってくるかもしれないなと私はきっかけをもらいました。

西川：学校にそもそも本来居場所が必要なかっていう、まあそもそも論で今、学校の先生は学校が好きだから多分みんな学校に居場所があって、学校というところが居場所ではないはずがないというふうに、今の発言で捉えられる部分が少しあったんですけど、我が校もですね、ある教員が居場所を作る時に「先生、かなしい、なんで私たちではダメなんですか、私たちいるじゃないですか、その居場所を必要としている子どもたちに私たちが関われないほどの悲しさっていうのを感じる」っていう話をしてくれたんですよ。まさしく私はその時よう言うてくれたと。本来そのやと思うと。ただまあいろんなこの分業制が進む中、あえて今居場所を作ることによって、我々学校教員の幅って言うんですかね、昔は、昔の話をしてもしょうがないんですけど、いろんなタイプの先生がいて、いろんなところに子どもが居場所を作ることができたと。運動場で遊ぶだけが休み時間の使い方ではなかった、お気に入りの先生っていうんですかね、高校になると本当にいろんな先生の幅が広がっていくか、部活の先生が居場所の子も居れば、社会的な聖職の若干匂いのするそういう先生のところにおいて、そんな話をするっていうのが居場所になったりと、あるいは文学的な、いろんなジャンルの先生のところに行って、いく原動力も子どもたちにもあったと思うんですけど、それがですね、原動力が若干少なくなってきた子どもの状況とそれから先生の幅がどんどん画一化している中でですね、だからこそ今今、子どもたちがふっと自分を出せる、自己基準、自分の判断でものを考える場っていうのをですね、アリかなと。だから今後ですね居場所、学校内居場所が本当に制度化して、制度化っていうか広がっていくのか、それとも学校の教員がですね、もう一度「あ、ふっとこう息抜きする場っているよね」っていうのを感じて行動をとるっていうのがですね、まあどういう方向に進むのかわからないんですが、ひとつの一石を投じるっていうかですね、学校の中の秩序をちょっと乱した、その方が学校内居場所って感じているんですよ。

新崎：ありがとうございました。ちょっと過激なこと言っている？あのね、僕ね、実感していること、先ほど施設で21年、教員で22年仕事してて共感することってなにかって言うと、多分施設の職員の人とサービスを受ける利用者、先生と生徒の関係ってね、対等にはなれんと思うねん。どんだけ先生が対等やでとか一緒にやって言っても、成績評価をする、されるっていう関係だったり、職員は職員でサービスを提供する側やから、提供を受ける側っていう考え方で言うとね、やっぱりナナメの関係っていうのは、僕はあえて作らなアカン関係やと思うんです。つまり、もう別に悪口言うたかって、お前なんか嫌いじゃって言うたかって、成績が悪くならない、逆にその人が来な

くても許される関係みたいな、そういうほっとできる関係っていうのが、僕は居場所のひとつの要素かなって。皆さんの言っているね、気のおけない関係とか自分のことを表明できるっていう、それは僕らワーカーとか教師は自戒的にならなあかんと思っているんですよ。つまり僕らがやれる、さっきの阪上さんの話で言うところの創造っていうところの中で、自分はどういう立ち位置に立っているかっていうのを思いながら支援していかへんかぎり、そのもちろん先生によってワーカーによって、対等に近いところまで持っていくスキルを持っている先生もいるし、ワーカーもいるねんけど、やはりそういった見えない権威っていうのは常に意識しながら動いとかなないと、そこが僕は校内居場所っていうところに注目しているひとつポイントやねんけど、その辺はどうですか、阪上さん。

阪上：そうですね。いやけど、そう思います。ちょっと話を違うふうにしてもいいですか。

新崎：全然いい。

阪上：その進路選択自体が、その今家買おうかと思っているんですけど。

新崎：いや、知らんけど。

阪上：例えば、家買うときも、近さなのか、築年数なのか、値段なのか、占有面積なのかこれって価値基準ですよ、自分の。これってこの会場にいる人全員が多分違う、まあカテゴリーできても違うと思うんですよ。これに至るまでは自分の幼少期に住んでいる部屋が狭かって嫌やったとか、とにかく広い、ちょっと古くても広い、私なんですよ、私ん家そんなに広くなかったんで、広さがすごく大事で、ベランダが広い方がいい、ルーフバルコニーがいいとかって自分の生活に基づいて基準ってできてて、その中で進路選択ってこれ家買うくらい3年間のね、自分の履歴書に一生付きまとうものなので、それくらい大事なものやって、私は塾の時ずっと言ってきたんですよ。基準はお母さんがいいって言っている、この子は違うねんからこの子のお母さんって。あなたはあなたでやってきたでしょ、そんな時にちょっと振り返って考えてみようよって、まずは子どもの話聞かないとっていう話をずっとしてきたんですけど。それ塾やから、お金もろてるからそれなりにしっかり責任もってやるし強気で言うし、お母さんもそれを求めてるし、ある程度受験を、強気に行けますけど、学校ってやっぱし、お母さんのやる気がお金払ってでも塾いかせたいっていうお母さんのポテンシャルと違うお母さんもたくさんおられるじゃないですか。今日、進路指導の先生が来られている、生島先生、いらっしゃいますかね。すみません、初めましてなんですけれどもいきなり。生島先生はずっと中学校で進路指導をされていたご経験があつて、今回お声がけした、西川校長経由でしていただいたんですけども、実際いろんな保護者さんずっとこう見てきて対話されてきて、特にその進路選択っていうのが難しい、難航する、言葉がなかなか引き出せない保護者とか家庭の傾向って何かあったのでしょうか。

生島：失礼します、生島といいます。よろしくお願いします。学校現場にはおるんですけど、今ほぼ実は教えていないので、大阪府の、ちょっと宣伝しますけど、進路教と言いまして、456校の中学校をまとめることを西川先生に無理やりお願いして作ったば

っかりなんです。まだ組織としては十分ではないんですけど、中学校それぞれで適切な進路指導ができたらいいなということを今メインでやっています。大阪市の方も実は6年前に作って、そっちの方は結構機能しているかなと、約30校、進路指導主事の方に話をして、今週またするんですけども、先ほど出ましたけど輪切りにならないように、さっきどなたかおっしゃられたんですけど、価値観を醸造している、作っているって言っていただいたんですけど、ほんまにできているのかなっていう、進路指導についても若い人が多いので、経験が浅い人が多いので、なかなかできていないだろうと思っているんです。その部分もやっていまして、なかなか実際の保護者のことはちょっと聞くくらいで、あとは自分の3年くらい前の経験ですけども、おっしゃられたみたいに、やはりその自分の価値観で子どもに威圧的に懇談で喋らせない、僕の場合はあの、担任の方に子どもは絶対喋られへんよと、やからもうプチ懇談、前に子どものこと聞きなさいと、子どもの味方は先生しかおらへんねんから、逆に押したるからくらいの気持ち言わんと、親の意見しか聞けへんようになってしまうよというふうに言っています。それともう一つは、まったく懇談に来ない、今あのノー懇談っていうのが3年生におるんですよ、ずっと1年生から。それどういうことよっていうんですけど、絶対来ないっていう、もう放棄ですね、ある意味こう育児放棄ちゃうかな、区役所に言うたれとか言っているんですけど、あのその両極端ですね、大体あのほとんどの保護者の方がまあ、普通ですね。塾のことは知っていて、学校ではハイハイと言うとって、あれ結果違うやん、塾のこと聞いているやんって言うのが多いですね。やからまあ、うちの学校については平和ですけど、ほんまにいろいろ両極端の方が増えてますので、その辺がちょっと厳しいだろうとは思いますが。すいません、ちょっとまとまりませんでしたけど、失礼します。

阪上：ありがとうございます。ちょっとそう、結構その進路懇談も若い先生自身は、あんまりなんかこう、あたながもう決めることだからねっていうところで、どうしてもお母さん側にこう付いてしまうことがやっぱ多くて、そんなところが見られるんですけど、特別に進路の研修とか懇談の研修とかそういったものもお時間も限界だろうし、どうなっているんだろうっていうのは、結構居場所であんまりそこは関与しないので、本人のしたいことを聞き出して、本音を聞き出して先生たちと共有するっていうことを繰り返すんですよ。なんか学校側さんのね、難しさっていうのは、あるんでしょうかね。

西川：進路選択に関わっての大前提っていうんですかね、子どもが選択し、自分の選択に責任を持たせる。高校へ行ってですね、私ほんまはここ希望してなかったん、親が勧めるから来てんっていう子はですね、まず間違えなく高校生活の最初でそのことについて悩みます。辞めるには至りませんが、やっぱりそこでかなり心揺さぶられるかなあと思います。その時に、でも自分で最終決めてんって言えた子はですね、まあ自分の選択に責任を持っている、なかなかこう自分の選択に責任を持てる場面ってあるようではないんです。進路選択っていうのはひとつの大きな自己選択の始まりかなあというので、進路説明会等では、親御さんには必ずそれは伝える。親御さんに進路の選択は、最後は子どもにさせてくださいと。「これでええな」ではなしに、自分で決めて答えを出してくださいという形でやってくれということは伝えます。教員側には必ずそれを伝えているか、なにを伝えるかっていうたら、今生島先生からも話しがあった

ように子どもの意見を必ず聞くこと。進路の希望調査なんかは、親の名前が書いてなかったらこれあかんでっていうふうになってしまうんですけど、子どもがなにを考えているかを考えていくっていうふうにはしている。

新崎：ありがとうございます。このフォーラム、COCOINIの立ち上げのフォーラムなんで、COCOINIの宣伝っていうかアイデンティティみたいなものを少しお話ししていきたいんですけどね、僕は、もちは餅屋っていう言葉が協働の時のひとつのキーワードかなと思うんですね。つまり、本当にあの学力っていうところで選択しようという子どもさんや保護者の方もいらっしゃる、でもそういった選択の例と、どこがええかわからへんっていう、ずっと昔の話ばかりするんですけど、施設で障害がある子どもたちって実際にいろんな経験してないんですよね、それでその時に、いつもいうのはあんパンとメロンパンとジャムパン、どれか選べって言っても食べたことないのに選ばれへんのですよ。つまり、COCOINIの役割っていうのは、そういう意味でいうと、あんパンってこういうもんで、ジャムパンってこういうもんで、それからメロンパンってこういうもんで、っていう提案とか情報を提供する場所、そういった場所も学校の中での進路指導を進めていただく、餅は餅屋、つまり教育のプロとしての進路指導と、やはり我々がこだわる子どもらの最大の利益っていうことでいうとね、本当はCOCOINIっていうのはすべての子やから、超エリートから本当に一番しんどい状況の、家庭的にも、いわばご本人の発達課題とかいろんな状況の中でしんどい子、すべての子っていうテーマなんやけど、我々はどっちかっていうとその一番生きづらさを抱えている子どもたちのサポートっていうことを中心にやっていこうと。これって合意形成できているよね。っていうふうな形でね、今日のテーマなんかも、その辺のところがちょっと思っていてね。なんかどう、阪上さん。

阪上：あのスクールソーシャルワーカーの視点とかもちちょっとお聞きしたいんですけど、新崎先生の話もありがとうございます。

谷村：あのちょっと進行上の都合もありますので、すみません、介入させていただきますが。先生、私クリームパンが好きなんですけど。まああの、見た目ではわかりませんよね、なにパンかってね、食べたことないと、それが経験値ですよ。ちょっと質問いただいていることもあるので、質問を島先生の方で簡単に解説をしていただいて、答えられるものは登壇者の方に答えていただくという時間を取りたいんです。すみません、田中さんと中村さんにちょっと一言ずつ、今までどこか興味を持たれた場所のコメントでもいいので、いただいて、それからあの島先生の方にお願ひしようかなと思いますので、ちょっと何か今思っていることがあったらコメントいただけますか。

田中：すみません、すごいそもそものことになるかもしれないんですけど、COCOINIの目的が居場所の提供だと思ってはいるんですけど、居場所の提供することによってなにを目指しているのかがちょっと僕が今ちょっとよくわからなくなっているなあと思っていまして、それが進路選択っていう話を今日やっているから進路選択だけの話をしているのかもしれないんですが、その居場所に来てもらうことによって、進路とかそこから先の道の選択肢をちゃんと持ってもらうようなことを目指しているのか、それと

もその居場所に来てもらうことによって、自分自身の価値観であつたりとかつていうのを再認識してもらう、その支援者も認識するし、子どもたちも認識する、そういったことのどちらがメインになっているのかつていうのがちょっと僕の中で分からなくなってきたままでいて、もしその進路選択つていうことをメインにするのであれば、学歴社会みたいな話、学歴を持つことがいいことなんだみたいな価値観で動いていくことになるのか、その大学名つていう意味での学歴ではなくて、学んだ歴史出会つたりとか経験ということを大事にした場所の提供をしていくことになるのかつていうことが、ちょっと今この話の中で、僕の中でちょっとどっちの方面に行きはるようなお話かなあつていうのがわかりにくくなってきたので、ちょっとそれをどっちなのかなあと思って聞いていました。

谷村：はい、ありがとうございます。えっと、まとめきれていないのでどっちも混在していると思うんです。すみません、いろいろと登壇者の方が寄せてくださっているんですけど、COCONIとしては学歴社会を問い直すつていうスタンスを持ちながら、そしてこのつながるつていうことで、もちろん子どもたちの進路に困らないつていうことは、それだけ社会が良くなるつていうことですので、かなり大きなところを見据えて、ただ特化しているポイントは中学生の進路選択つていう時期、つていう場を設定しているので、すみませんちょっと議論がいろいろと混在しています。ありがとうございます。またいろいろと聞かせてください。中村さんいかがですか。

中村：そうですね、ちょっとコメント難しいんですけど、地域側の立場の人間として、その私自身にも言えるんですけど、皆さんのつていう地域つてどこを指すんかなつてつていうところ、誰を指しているんかなつてつていうところ、これ本当に自分がコミュニティワークする上でもそうなんですけど、そこをまあ職種によつても違つてつていうと思うんですよ、その指している地域つてつていうのが。その指している地域を支えている人がつていう現状なののかつてつていうところも、しっかり把握しながらアプローチしていくのが、今後地域の中での居場所つてつていう中では重要なかなつて、お話聞いていて思いました。ありがとうございます。

谷村：はい、ありがとうございます。今後そういう方向つてつていうことで、視点を、気づきをいただけたかなと思います。立ち上げフォーラムですので、思いをぶつけるみたいな形になつてしまつて、これからいろいろとやつていきたいなつてつていうところなのですが、島先生、質問の内容のまとめをいただいてもよろしいでしょうか。

島：まとまりません。困つてるんです。あのですね、地域とかですね、居場所とか、今私自身は発展途上だつて思ふんです。それぞれの持ち場で一生懸命にその子どもと向き合つて、様々な活動があつて、それがあのまだ、なんていうんですか、発展途上ですから、とてもやないけど整理された状況で物事が進んでいるわけじゃない。あの全体状況もそうだつて思ふんですけど、それぞれのそれこそ地域ですね、それぞれの学校であつたり、地域であつたり校区であつたり、そこで、まあ言つてみたらね、止むに止まれぬ気持ちで何人かの大人が立ち上がつて、そうして今日食べていけない子どもがおるのをどないするのつてつていうて、食堂が始まつたりですね、行きたいのに行けない状況の子が家にずつとおるねん、どうすんのつてつていうことで不登校状況の子どもを集めて何か活動したり

ですね、そういう子どもの身近にいてる大人がやむに止まらない気持ちでそれぞれのところにお子さんを集めてですね、いろんな活動をしている。勉強がわからないのどうすんのってことで、夜特別に勉強を小学生や中学生に教えているという活動がそこそこに、そういう活動があって、それで勉強が少しわかるようになったり、あるいは週1回やけれども、栄養満点の食事を満喫できたり、というようなことなんだけれど、私たちが今気づき始めているのは、空腹を満たす、ちょっと学力が身に付ついたということに留まらない意味があるんじゃないかではないんでしょうか。それが居場所という言葉で表現されているのではないのかなあというふうに思います。単に食べる場所だけではなくて、そこに隣に同じような子どもがおったり、じいちゃんばあちゃんがおって、ちょっとほっとする会話ができたりですね、そして自分のことについてちょっと考えてみようかなとか、これからのことを少し考えてみようかなとか、家族のことで詰まっていることでちょっと距離置いて見てみようみたいなことが、その場で子どもを中心に何かしらおこってきて、そういう場所で、交々みなさまが表現されている居場所っていうのは、そういうことでなにかしら共通の言葉になっているのではないかな。しかし、まだ発展途上ですから、何かこうだというような定義に当てはまるような状況ではない、まだまだない、ということがこの中に見て取れます。この一番中心のところは、居場所活動のそれぞれの連携がどうなんやとか、それは地域とか学校で出来上がっているけどどうなんやとか、あるいはそこに、SCやSSWの専門家の方が入ってきているけどどういう関係を作っていったらいいのかとか、あるいはそれぞれのところである活動をどんなふうにつなげていったらいいのかとか、ネットワーク、それがどんな方向を目指したらいいのかっていうことを交々書いていただいています。おそらく今日のテーマの、なにについて考えたらいいのかよく分からんっていうところから今日はじまったと思うんですけど、そういうことが中心的な内容かなあと。それに加わって、先ほどあったようにオンラインゲームの問題であるとか、ゲームだけではなくてコンテンツですね、様々な学習コンテンツもあるし、様々なコンテンツがある問題とか、それからまあ最後の方、本来のことに関係する将来のこと、大切なことはなんだろうとか、それから行政もですね、不十分ながら国も貧困対策は最重点課題に挙げざるを得ない状況というか、そういうことになってきているので、行政はしっかりせんかというて、尻叩くということだけではなくて、その活力を私たちは地域でどう活用するというか、使いこなすというか、まあそんなこともあると思うんですけど、そのバックアップの課題とかですね、当然今さっきからでている、とてもセンシティブな一人ひとりにかかっているととても大事な情報を、当然扱うわけでそれをどんなふうに情報管理をするというか、取り扱うのかという個別の課題もたくさんある、まあここに書ききれない、たくさんおそらくあるでしょう。そのコアには今のその居場所という、私たちが言い始めている考え方を中心にして、こんな課題があるなあというふうなことがこの中から見て取れるのではないかと。あといっぱい言いたいことあるんですけど、このくらいでひとまず終わります。

谷村：ありがとうございました。もし答えていただける質問があれば、答えていただけたらいいかなと。高校選びにおいて最も大切なことは何だと思いますかという結構シンプルかつコアなんですけど、これどなたがよろしいでしょうか、スクールソーシャルワーカーのご意見を代表してお願いします。

田中：そうですね、まあなにが大事なのかって言われると、僕全然分からなくて、その子どもが大事にしたいことは何かにすごいつながるかなあって思うんです。僕がスクールソーシャルワーカーとして、教育に語るのはすごい謁見行為だなと思っているんですけども、僕、教育っていうのはその子どもへの投げかけで受け取ったその子どもがどう学んで、成長していくかってことだと思っているんです。っていうふうに考えた場合、その高校を選ぶにあたって、どんな経験をしたいのかとか、どんなメッセージを受け取りたいかというか、そういったことを学校の先生と一緒に考えながら、どういうふうに進路と一緒に選択していくのを助けていくのかっていうことを、一緒に考えていく、一緒にそれを作っていくながら子どもが一番やりたそうなこと、現時点で一番興味を持ってそうなこと選ぶのが一番大事になってくるのかなあっていうふうに思います。

谷村：はい、ありがとうございます。私の友人で私学のすごく簡単な高校に進んだ友人がいたんですけど、中学はかなり不登校気味だったけれども、高校に入った瞬間めっちゃ楽しいって、周りが似たようなたつぱっかりやねんって、ものすごい生き生きしていて、あ、羨ましいなって思ったことがありました。余談でした。あと、すいません、中学校は地域性がなくなっていると思いますが、何か工夫されていることはありますか。これは中学校の先生でしょうか。では、高山先生に。

高山：中学校の地域性、難しい。失礼します、高山です。すごい難しい質問かなあと、中学校に地域性がなくなっているのに工夫していること、すごい難しいなあと考えていて、なかなか答えが見つからなくて、地域と連携していくって本当に難しいっていうか、学校現場ってやっぱり、まずは子どもとのつながり、そこから保護者とのつながりってなってきた、地域の大人に関して、じゃあどうやって連携できるのかって本当に難しく、だからまあ地域との連携っていうよりかまず、どれだけ子どもの声が聞けるかっていうのと、その後ろにいる保護者の方の思いとかをそれぞれのつながりの中で聞いていけるか、その先に地域があるのかなあと考えているので、なかなかこう例えば地域の団体とつながっていくかっていうのは一義的にはすごく難しいことやなあって思っていて、だからこそまあ僕もこういう場に参加させてもらって、なんかこう地域の中から出ている情報を学校現場に戻していけないかっていうことを考えて模索しているところではあります。なので、非常に学校現場で、じゃあ地域とどうっていうのは自分の関わっている学校の現状では非常に難しいかなあというふうに思っているところです。またヒントがあれば教えていただきたいなあとちょろど思っているところでした。

谷村：はい、ありがとうございました。だからこそ、先生がこうやっっているんな会に出て知ることをしていうのがまさに工夫かなというふうに受け止めました。あと2、3いけるといいなと思うんですが。三角関係のお話がありましたが、市民公益活動団体と行政の関わり方について、あるべき姿についてもう少し教えてくださいということで、阪上さん。これはまた追々、これはちょっと大きなテーマですので、きちんと取り上げて、考えていきたいと思います。

西川：今のね、中村さんに学校と、教育と福祉の息吹が難しい部分もあるかと思うんですけど、そこちょっと話していただけないか。

谷村：中村さん、ちょっとすいません。

中村：そうですね、専門性っていうところがまあ、考え方とか価値観とかが、そのベースが違う買ったりするので、その中でこちらからの提案の仕方もそうやと思うんですけど、そこでこう学校の先生たちもお忙しい中で、福祉の視点を子どもたちに伝えたいなあと思ってくださっているところには入っていくんですけども、それをじゃあ市全体に広げる上で、やっぱり学校によっても考え方が違ったりすると思うので、そこでこちらがこう新しい先生たちのお仕事を増やしているわけではなく、ちょっと工夫するだけで先生たちの悩みとかも改善できるよっていう提案をしていければ、ちょっとずつ弊害がなくなるのかなあって思うんですけども、やっぱりこう外部の団体が教育、特に学校っていう現場に入っていくっていうのに、ちょっとこう抵抗感であったりとかっていうのがまあ、あるのかなあっていうのは話をしているところがあります。まあ個別支援で困っているケースの子どもがおるねんとかやったら、比較的相談はするんですけど、じゃあこう福祉教育であったり、地域づくりでっていうところであったり、地域とつながるっていうところで、地域の人ってどんなやねんとかっていうところもあると思うんで、そこでイメージが湧きにくかったりっていうので弊害があるかなっていうのは思います。

新崎：一個だけまたいらんこと言うんですけど、地域って二面性がすごくあるなあと思うんです。つまり、本当に共感してくれたら居場所としてつつみこんでくれる包括性もあるけど、ちょっといわば偏見とか、いろんなことで排除してしまうっていう両方の立ち位置があって、多分中村さんがやろうとしていることは、そういう包括性っていうか、居場所に近い関係をどう作っていくかって、これもまためっちゃめっちゃ苦労しているんですよね、今。だから地域って言葉の中に、あったかだけを求めるのではなくて、地域の中での偏見であったり、そういったところから起こってくる生きづらさを押し付けられている状況っていうこともある、これは多分学校の中での課題とも同じで、どっちもが最高にいいところではなくて、それぞれが二面性を持ちながら、その強みをどう伸ばしながら、弱みをどう削っていくのかっていうのがあるねやろなああってちょっと思いました。

谷村：はい、ありがとうございます。その通りだと思うんですけど、やっぱりお互い人間だよねっていうところで、長短あるっていう基本に戻ると、意外と壁低くやり取りできるのかな、今はそれを邪魔する物が結構多いので、これ言ったらあかんとか、これはこう言わなければいけないとかみたいなことの方が優先してしまっ、人対人っていうか、それこそ昔の教員文化にはそれくらい許されていたかもしれない踏み外し感とか、そういうものが社会全体でもう少し、こんなにこうわけなくていいよねとか空気感が出ていくと、居場所としても学校としても地域としても、何か変わっていくのかもしれないなというところでしょうかね。最後、簡単に、校内のSC、SSWと居場所の活動の連携はありますか。阪上さん、ありますか。

阪上：あります。作ろうとしたらできます。自動的にできるものではないですね。

6. 提言まとめ

谷村：今回の会を受けまして、無理やり着地点を探そうということではないので、それぞれ何か思うことがあればそれだけでも収穫だったかなと思いますし、今度こういうことをちゃんと考えていった方がいいんじゃないっていうご提案がたくさん出てくると、そういうことについて取り組んでいきますし、COCONIだけが取り組むのではなくて、みなさんと一緒にやっていきたいなと、何なら仲間になっていただきたいなというところですので、こんなことやりたいとかやりましょうとか、それくらいの私たち自身のこととして考えていけるといいのかなあというふうに思っております。最後この会からの提言をどうするかということなんですが、無茶振りをしてもいいですか。登壇者の方に、こういうふうに今後こうしようとかこうあるべきだとか、こうしたらいいんじゃないかとか、今までの話全部無視してくださっても結構ですし、今後に向けて、自分の中でもいいですし、COCONIへのメッセージでもいいと思いますので、一言ずついただくという形で、いきましょかね。

新崎：それでは提言ということで、それぞれの登壇者の方から、ご意見いただきたいと思います。田中さんから、スクールソーシャルワーカーでちょっと興味関心あるんやったら出てって無理にお願いしました。詳しい説明やCOCONIの立ち位置とかも言わずに出ていただいた田中さんと中村さんでした。何か提言というか、感じたことでも感想でも結構ですので、お願いできればと思うんですけど。

田中：そうですね、スクールソーシャルワーカーとして、すごい支援していく中で大事ななあと思うのが、別に子どもが生きる世界っていうのが家と学校だけではないよっていうことは一番伝えていかなダメなことだろうなというふうには思っていて、誰にでも助けてもらえる場所はあるっていうか、逃げ場があるっていうのはすごい伝えていかないといけないだろうなというふうには思っています。ただそれを紹介する立場にある僕たちスクールソーシャルワーカーはもっと地域のことであったりとかはもっともっと知っていないといけない。その知っていくにあたって社協さんであったりとか地域で活動されている方であったりとかからも僕たちは学んでいって、学校にとってもいいような場所であったりとか、子どもにとってもいいような場所っていうのもっと作っていったりとか、見出して行ったりしていかないといけないんじゃないかなっていうふうに思いました。

新崎：ありがとうございます。中村さんごめんね、無茶振りで来てっていうて、お願いします。

中村：そうですね、まあ社協の立場もあるんですけど、やっぱりできることってすごい限られていたりするんです、まあ分野が広いっていうのもあるので、っていった中でやっぱりミッションとしてはその本人さんたちが自分らしく、この住み慣れた町で暮らしていくっていうところがミッションであるので、そこのCOCONIさんであったりとか、学校さんでもそうなんですけど、そこってきっと同じ通じるものかなと思うんです。

役割分担ってまあいろいろとあると思うんですけど、専門性もいろいろとある中で、一緒につながりを持って、一緒に何かできていったら、きっと広がりもできてくるだろうし、今までできなかったことっていうのができてくるのかなっていうふうに思ったので、支援者同士がきっちり手を取り合える場っていうのが今後すごい必要なかなっていうふうに思いました。

新崎：ありがとうございます。社協って各市町村に必ずあって、地域づくりっていうことをテーマにしているんですけども、なかなか今、教育の現場の中でも協働っていうのがまだ弱いってところで、今日中村さんに登壇いただきました。大きな拍手をお願いします。では、西川さんお願いします。

西川：COCONIへの提言ということで、絞って言えば、COCONIに進路に関わってですね、それぞれが自分の人生を考える上で、様々な生き方を提供する、こんな生き方している人いるよ、あんな生き方をしている人がいるよっていう、身近な存在であれば、おっちゃん、どんな人生歩んできたんっていう時に、こんな人生歩んできた、こんな人と出会ったというようなことを子どもたちに伝える、学校でももちろんやっているんですけど、学校にはもういろんな何やら教育っていうのにですね、時間をとってしなさいというようなことがあって、たくさん教育をしていると。もうこの教育はしなくていいですよっていうのはなく、どんどん増えている。癌に関する教育をしてくださいます、薬に対する教育もしてくださいっていうふうにどんどん増えてくる中で、子どもたちに何を提供するのかっていったら、やっぱり生き方、いろんな大人の生き方を紹介する、それが地域社会に今まであったんでしょうけれども、それをこのCOCONIです、提供していただいて、自分の進路選択の時に求める、自分が描いている大人像をおぼろげながらも、中学校の段階で像を作り上げることができる、そんな役割をしていただければなあと、学校どんなんあるの、どんなふうな進路選択できるのっていうのはですね、もちろん学校の方に任せていただいて、生き方を紹介するっていうようなものがあって欲しいかなあというふうにちょっと感じました。

新崎：はい、ありがとうございました。僕らにしたら本当に西川先生みたいな先生がいてくれたらいいなあとずっと思いながらお話聞かせていただいていたいました。大きな拍手をお願いします。最後に、お疲れ様でした、阪上さん。COCONIのフォーラムやからってちょっと抑えめにお話しされたようです。もっと過激だそうなんですけれども、冗談ですよ。では、一言よろしいでしょうか。

阪上：私は、COCONIは、中村さんがおっしゃったように、たくさん、いろんなメッセージが多かったんで、一体何の団体なんだろうというところから、私も関わり始めています。私は、中学校の進路選択っていうところが具体的な手段っていうか、場面、時期であって、人生の選択っていうのは居場所っていうのがないと、やっぱり価値基準が育たず、幸せな選択っていうのができないと思っているので、なのでやっぱり私、FAIR RORDとして参加している立場として、大事にしていこうと思うのは、参加する若者、関わる人たちのそれぞれの価値基準で判断する居場所を作り続けるということが、私たちの、私が大事にしていきたい提言というか、というところかなと思います。手段としては、役割創造というところが具体的なところにはなるんですけど

も、ただ、なんせ居場所がないと、私は家庭、ギリギリ、何となく居場所だったと思います。あんまりいい思い出はないですけど、ただやっぱり家庭があったから、経済状況も伴って、福祉的なものってすごくあの、大事な重要な要素になっているので、進路選択で。お金がないから、しんどい家庭はみんな公立の一択でしかない、そういう背景もあったりするので、福祉の領域も教育の領域も合わさって進路選択、幸せな進路選択ができるんじゃないかなと思うので、人生の進路、それぞれ関わる方たちの選択においても、それぞれの自己実現の場であるように、そういったステイトを作り続けたいと思います。なかなか一文にまとまりませんが、すみません、ありがとうございました。

新崎：役割の創造とかね、三角関係、三者関係かな、それを作ること、それからいわば議論の場も必要、考え方も違うっていうようなね、そんなお話もしていただきました。もう一度、大きな拍手を阪上さんをお願いします。ということで、コメンテーターと言いながら、チャチャ入れだけで終わってしまったような気がします、反省しております。ありがとうございました。では、司会に。

谷村：はい、ありがとうございました。それでは、ディスカッションの形としては、これで終了させていただきます。ちょっとフロアからもっと、そうそうたる方々に来ていただいているので、いろんな意見を聞きたいのですが、そうするとあと3時間くらい延長しなければならないような形になります。ぜひ、今後ともこういった発信を続けていきたいと思いますので、機会があれば、一緒に動いていただいたり、考えていただけると本当にありがたいかなと思います。



設立フォーラム参加者

7. フォーラムを終えて（今後に向けての一言）



NPO法人COCOINI設立時メンバー

島善信	水木千代美
厳しい課題のある子どもをはじめすべての子どもたちが、自分にぴったりの進路先を自ら選びとり、一歩先への希望を胸に歩みだせるよう中学卒業後の進路選択を応援したい・・・ 学校だけ、地域だけ、行政だけでなく、地域で協働するコミュニティーとして大人がつながり合うことで、子どもたちの生き方の選択肢を広げたい・・・ そう願って多彩な大人が集い、ようやくNPO法人COCONIを立ち上げ、設立フォーラムが開催できました。「子どもと大人が出会う場、大人どうしがつながる場」づくりを通して、地域と学校をつないで、福祉と教育をつないで様々な活動にチャレンジしていきます。一緒に応援の輪を広げてみませんか。	社会情勢が変わり、教育のあり方も変わる中、子どもたちが置かれる環境も変わります。子ども一人一人の状況も、性格も、求めるものも違う中、私に出来ることはわずかだと思っています。だからこそ、たくさんの方とともに取り組んで行きたいと思っています。子どもたちと同じ目線で、ともに悩み考え、子ども自身が一歩を踏み出していくお手伝いをしたいと考えています。子どもと大人の関係には相性もあります。だからこそ、様々な立場の、年齢も性格も違う大人が関わる必要があると思います。ぜひ、私たちと一緒に子どもたちの一歩先を考えていただけたら幸いです。
新崎国広	岡本智子
「教育と福祉の協働、地域と共にある学校・施設」は、私の実践と研究のテーマであり、ライフワークでもあります。ソーシャルワークで言うと、「入所型施設におけるカプセル化した支援」であり「学校のなかでのカプセル化した教育」への疑問・怒りと葛藤から生まれました。今回のフォーラムで、公立中学校とNPOによる教育支援・教育協働の実践から、学校(行政)の公平性・平等性の利点と限界点、NPO(民間)の柔軟性・先駆性の利点と限界点の両方を学び、両者を切り分けるのではなく重なり合う部分を豊かにすることで、個々の利点を活かした「助け上手、助けられ上手」の関係づくりの重要性を再確認することができました。これからも、COCONIの仲間と試行錯誤を繰り返しながら、「教育と福祉の協働」について取り組んでいきたいと感じるフォーラムでした。	私自身、大人になるまでに何人の大人と出会って来たのか？そういえば、あのおっちゃんもおばちゃんも私を気にかけてくれていた。どんな人も「意味のある大人だったんだな」と今になって思うのです。今回のフォーラムの登壇者の方々も様々な立場から子どもを支援したいと日々奮闘される様子に刺激を受けました。COCONIもいろんな子ども達にとって「意味のある大人」になっていけるよう。みなさんとつながって行きたいと思いました。

有田早紀	阪上由香
登壇者の皆さんもCOCOCONIのメンバーも、直接的また間接的に関わっている子どもたちのことを想い、日々いろんな活動をされていると思います。私自身もいろんなところで関わっている子どもたちを見ていると、本当に複雑な背景があったりして「生きづらさ」が伝わってくるがよくあります。こんなふうに様々な現場で、それぞれ違う立場の人たちが集う場に参加すると、同志というとおこがましいかもしれませんが、「明日からもがんばろう」という気持ちになります。「おとなと子ども」、そしてその周りのおとなたちがつながることの重要性を改めて実感しました。微力ながら尽力していきたいと思います。	このフォーラムに集った大人たちは社会的役割は違っても、若者たちに関心があり幸せに生きていくことを願っていました。 これだけの人たちが集まっても地域活動や支援制度、学校教育や関心がある個人それぞれがそれぞれの方法でばらばらに展開している、そこから抜け落ちる若者に支援が届かない状態が続いていく。 子ども若者の最善の利益のために、福祉や教育などの既成の領域を超えてそれぞれの役割を少しずつ重ねていくしかないといわたしは思っています。 必要なのは勇気と想像力と“かさねる人を雇う”お金、かな。
森本光展	高山桂
9年前に大阪で産声をあげた校内居場所の一角が様々な波紋を呼んでCOCOCONIがここにある。勤務校で、大阪で2番目にできた高校内居場所活動を実践してきた者として感慨深い。高校内居場所カフェについては、すでに『子どもの貧困対策と教育支援』（2017年末富芳編著）や『学校に居場所カフェをつくろう！』（2019年居場所カフェ立ち上げプロジェクト編著）において全国の様々な方々からその意義と活動について文章化されている。COCOCONIのフォーラムは、それに屋上屋を重ねることなく、SSWやCSWや中学校の視点を切り開けたように思う。私自身は、8年間一貫して教育相談と学校心理支援の立場から関わってきた高校教員として、あるいは、研さんしてきたウィニコットの理論から居場所を思索してきた者として何かの形で表現していく使命が自分にあると感じました。	中学3年生でどのように進路を選んだか、という問いに「ほかに選択肢がなかった」「ここしかない」と教師や親に言われた」と、ネガティブな回答がある一方、「学力」（点数）が低くても、学びたいことや将来の自分の姿をイメージして進学先でがんばる子どももいることに希望を感じた。どのような進路を選ぶかも大切だが、それまでにモデルとなる先輩の姿、多様な価値観を示してくれる人との出会い、勉強のことやお金のことや悩みを聞いてもらえることが、進路選択だけではなく、その先を生きていくうえでも大切なことだと思いました。学校教育のなかでも、そうした進路に前向きになれる力をつけていくとりくみが、もっと大切にされるようにしていきたいです。COCOCONIの活動に参加させていただきながら、学校現場に生かしていけたらと思います。

小西順二	栗本正則
コロナ禍の中、一斉休校などもあって過密日程の二学期、「設立記念フォーラム」にも参加できずとても残念でした。しかしだからこそ見えてきたこともあると感じています。授業だけではない学校の役割、オンラインでは補えもの…そういうことを日々感じていると「人と人のリアルな出会い」がいかに重要か痛感します。 さまざまに背景や立場の違う大人たちが集い、中学生をはじめとした子ども若者の未来を共に考える。子どもたちにはこれまで知らなかった世界を伝え、大人たちも新たな人たちと出会う。 坂上さんの報告にある「こどもとおとなが出会う場」と「支援者がつながる場」こそ、COCONIが目指すところではないでしょうか？新しい道の一步を、一人でも多くの皆さんと一緒に歩めたらいいと思います。	「主体的な進路選択」をするために、多くの学校・職業・ロールモデルなどの情報を提供すると言われても、大きなため息をついて分厚い「メニュー」を閉じてしまう。 こども自身の性質や家庭の経済状況、人間関係など課題が多いほど、二度とその「メニュー」を手に取りません。 不登校の生徒さんと学校の廊下から暮れていく空をボーッと見ながら、 「どの季節の空が好き？」 「夜の空が好き」 「なんで？」 「暗いと多くのものを見なくて済むから」 多くの情報をインプットして、「主体的な進路選択」をするには、十数年の人生経験では不可能で、だから親や先生の価値基準で判断する。仕方ないのかもしれませんが。 だけど、生徒さんの持つ価値基準の中で過ごす時間を丁寧に刻み、積み上げていくことで、夜空にぼんやりと進む道が見えたらいいと思います。
森本英之	太田淳
「不登校の小中高生 全国で23万人！過去最多7年連続増！」（2019年度文科省調査より） 日々子ども支援の市民活動の中で思うことは、多くの親子が孤立していること、子どもの知識や能力の獲得にも格差が反映されていること、自立して生きる道筋を描けていない子どもが多いことです。この現状を大人達が真剣に受け止め、つながりの中で具体的な伴走を始めることが必要だと思います。今回のフォーラム、事例報告者・パネリストなど皆さんがそれぞれに熱く語られ、子どもを支える立場でつながっていたことが印象的でした。充実した時間でした。ありがとうございました。	最近、勤務校の生徒から「今は英語の勉強が楽しいんです。」と聞いて嬉しくなりました。1年前は不登校気味で、教員の立場から見て「意欲のない生徒」だった彼の言葉に考えさせられました。この1年間、その生徒に対して、私が一生懸命英語を教えたわけでもなく、英語の必要性を熱く語ったわけでもありません。ただ、「最近どう？」と話しかけて何かを始めるのを待っただけでした。このやり方が教育の正解とは思いません。生徒によっては、しっかり勉強を教えてくれる学校で成長できる場合もあるからです。ただ私は、生徒の変化をじっくり待つポジションでいたいのです。そうすることで「どの高校が自分に合うのか？」の問いを中学生に持たせられるのではないかと、そしてこれが進路選択の多様性を生み出すのではないかと、日々考えています。

角野綾子	藤村裕爾
日々、学校現場で活動する中で「子どもとおとなが会う場」の大切さ・必要性を実感しています。日常的に会う先生・保護者だからこそこできることもあるし、「先生・保護者ではない」からこそこできることもあると思います。 今回のフォーラムは「すべての子どもたちが一歩先への希望をもてる社会」を実現するために、子どもに携わる人達がどのような連携をし、どのような相互作用をうみだしていったらいいのか、そんなことを考える場となりました。	この4月から、摂津市の教育委員会と市内の全中学校が「摂津市キャリア教育推進協議会」を立ち上げました。この協議会のメンバーにCOCONIが参加しています。このような会議にNPO法人が参加することは、稀なことだと思います。「すべての子どもたちが一歩先への希望を持ち、大人たちがつながることで子どもたちの生き方の選択肢を広げること」をミッションとして、摂津市の子どもたちの課題や地域の実情を踏まえたキャリア教育をすすめていくために、COCONIのノウハウや人脈や活かすことができればと思います。
谷村綾子	
私たちが大切にしているものは何なのか、あらためて多方面から考え直す機会になった設立フォーラムでした。同じものをみても、立っている場所が違えば全く違った形に見えているかもしれません。相手の立ち位置まで移動しなければ、その人がどのような形を見ているのかは、本当にはわかりません。 「連携」にはそのような難しさがあります。 揺るがない核をもちながら、常に進化し続ける、そんな柔軟な団体でありたいと思います。私たち大人自身が「一歩前へ」進むことで、子どもたちも「一歩前へ」進んでみようかな、と思うのかもしれません。「弱いものは上へ、強いものは下へ」。	

資料

「進路選びのヒントーこんな学校あったんだー」完成記念フォーラム（2019年3月1日）

トヨタ財団しらべる助成事業：「進路選びのヒントーこんな学校あったんだー」完成記念フォーラム 2019年3月1日

子ども支援のために 地域と学校でできること

学習支援を始めて6年、進路を決めなければいけない子どもたちを見てきて、「受かる高校」を選ぶだけでいいのかな？という思いが芽生え、高校の学校説明会に行くようになりました。その思いにたくさんの方のお力添えをいただいて、「進路選びのヒント」（裏面参照）が出来ました。

作成にあたり高校の先生方、在校生、卒業生のインタビューを重ねる中で、大人がすべきことが少しずつ見えてきました。それは学校だけでなく、保護者だけでなく、様々な人が協力し合ってできることだと思うのです。

「普通のおばちゃん」に協力していただいた皆様には感謝の思いでいっぱいです。皆様にこのフォーラムをお届けいたします。

Connections For Children 代表 水木 千代美

日時：2019年3月24日（日） 14時～16時50分

I 部）14時～15時50分 定員 100名 参加費 無料

II 部）16時～16時50分 定員 30名 参加費 資料代500円

※申込み不要ですがII部は申込みの方を優先とさせていただきます。

場所：千里金蘭大学 3号館7階視聴覚教室（大阪府吹田市藤白台5-25-1）

※アクセスは裏面参照



※申込みメールアドレスはこちら
little-connections@xqb.biglobe.ne.jp

基調講演講師：生重 幸恵さんのプロフィール

文部科学省第9期中央教育審議会委員。
PTA会長時代から、学校を支援する活動を積極的に行い、その経験により区内他校PTA会長経験者とともに、2002年にNPO法人スクール・アドバイス・ネットワークを設立し代表に就任。
全国の教育委員会・PTA等主催研修会で講師を務め、企業の教育支援活動の推進にも助力、社員研修やフォーラム等を実施。企業の持つノウハウを学校授業につなげるためのプログラム開発を手がける。



生重 幸恵さん

I 部：基調講演とパネルディスカッション

14時	開会の挨拶
14時10分 (40分)	【基調講演】生重 幸恵（いくしげ ゆきえ）さん 「中学生の進路支援にあたって地域や学校ができること 地域学校協働活動の在り方」
14時50分	・・・休憩・・・
15時00分 (50分)	【パネルディスカッション】 「中学生の進路選択支援の可能性を探る」 パネリスト 生重 幸恵さん（文部科学省第9期中央教育審議会委員）/ 島 善信（元 大阪教育大学教授）/ 新崎 国広（大阪教育大学教授）/ 小西 順治（大阪府立春日丘高等学校定時制教諭） コーディネーター 谷村 綾子（千里金蘭大学准教授）
15時50分	I 部 閉会

II 部：参加型ワークショップ

16時 (50分)	「主体的な進路選択のために私たちができること」ー「進路選びのヒント」を題材にー ファシリテーター 水木 千代美（NPO法人まどり代表理事）
16時50分	II 部 閉会

主催：Connections For Children（コネクションズ フォー チルドレン）

水木 千代美（NPO法人まどり代表理事）/ 島 善信（元 大阪教育大学教授）/ 新崎 国広（大阪教育大学教授）/ 谷村 綾子（千里金蘭大学准教授）/
森本 英之（吹田子ども支援センター代表）/ 森本 光展（大阪府立箕面東高校教諭）/ 小西 順治（大阪府立春日丘高等学校定時制教諭）/
栗本 正則（NPO法人フェアロード理事）/ 太田 淳（大阪府立東淀川高校教諭）/ 福岡 裕太（吹田市立高野台中学校教諭）

後援：大阪府教育委員会 / 吹田市 / 吹田市教育委員会



どのタイミングで誰が届けるのか？
ヒント
進路選びのヒント

ー子ども支援のために地域と学校でできることー

「どうなる？これからの高校改革と進路選択。 私たちに求められるものとは」

これからの子どもには、急激な社会変化と予測困難な時代に対応し、進路選択の目的意識や意欲を育て、自分らしい人生を築いていく力が求められています。中学卒業後の進路選択は、選択肢が広がる一方で入試制度も複雑になり、結果、テストの成績のみで決まってしまう傾向があります。

すべての子どもが、主体的に進路を選択できる支援活動が、地域と学校のこれからの共通の課題であり、多様な協働活動を通じた地域教育コミュニティの創出が求められています。

こうした課題に地域から応え発信するため、「子どもキャリア支援研究会」を設立します。創会に際して企画した本フォーラムでは、ますます大きな変化が予測される高校のあり方や入試選抜制度を前に、「私たちに何ができるか」を改めて考えます。

子どものキャリア支援研究会 島 善信

日時：2019年7月20日（土） 13時30分～16時30分

参加費 無料 定員50名

※申込み不要ですがお席は申込みの方を優先とさせていただきます。

場所：吹田市立市民公益活動センター「ラコルタ」※アクセスは裏面参照



※申込みメールアドレスはこちら
little-connections@xqb.biglobe.ne.jp

記念講演者：米原 泰裕さんのプロフィール

京都大学教育学部、東京大学公共政策大学院卒業。平成13年に文部科学省に入省。教育、科学技術、スポーツ、文化関係など幅広く経験。

特に、初等中等教育関係では、教員公務員制度（公立学校の教員人事・勤務など）、教育課程（学習指導要領の改訂など）を担当。福岡県教育委員会に2年間出向し、高校教育課長として県立学校の生徒指導を含む教育内容面を担った。

現在は、内閣官房に出向し、Society5.0を目指す成長戦略の策定に関わり、特に教育全般から雇用、スポーツ、文化の政府全体の戦略の策定に携わっている。

プライベートでは、子どもの通う小学校のPTAの設立に関わり、初代会長（3年間）を勤める。地元の学校の教員研修の講師等を引き受けるなど、地域でも学校に関わっている。趣味、柔道（五段）。



米原 泰裕さん

タイムスケジュール

13時00分	開場・受付
13時30分	研究会創会のご案内（説明者：島 善信）、事務局メンバーの活動紹介
14時00分 (30分)	【基調報告】報告者：谷村綾子 2018年の調査・活動から浮かび上がってきたもの 2018年度の高校ヒアリング、在校生や卒業生のインタビューからの考察をご報告させていただきます。
14時30分 (40分)	【記念講演】米原 泰裕さん 「ぼーっと生きているのでは？」と言われない教育改革～未来逆算と現場視点の相克をこえて～ 文部科学省、学校、子どもを取り巻く大人たちが、互いの立場をこえて、未来を見据えつつ、国が進める改革と、今まさに私たちが取り組むべき協働の課題についてお話しいたします。
15時10分 (40分)	【講演を受けて】（米原 泰裕さん、森本 光展、阪上 由香） 会場の皆様によるグループディスカッション 「質疑応答と共有」の時間
16時20分	挨拶・閉会（16時30分）

進路選びのヒント
こんな学校あったんだ！

2018年度に作成しました。※在庫がある限り、1冊500円にて販売いたします。



主催：Connections For Children（コネクションズ フォー チルドレン）

代表：水木 千代美（NPO法人まどり代表理事）/ 島 善信（元 大阪教育大学教授）/ 新崎 国広（大阪教育大学教授）/ 谷村 綾子（千里金蘭大学准教授）/ 森本 英之（吹田子ども支援センター代表）/ 森本 光展（大阪府立箕面東高校教諭）/ 小西 順治（大阪府立春日丘高等学校定時制教諭）/ 阪上 由香・栗本 正則（NPO法人フェアロード理事）/ 太田 淳（大阪府立東淀川高校教諭）/ 岡本 智子（コードモト）/ 有田 早紀

後援：大阪府教育委員会（申請中）/ 吹田市 / 吹田市教育委員会

NPO法人COCONI設立記念フォーラム
子どもたちの主体的な進路選択支援のための連携を考える 報告書

発行年月日 2021年5月1日

編集発行者 〒565-0732 大阪府吹田市藤白台5丁目25-1

千里金蘭大学生生活科学部児童教育学科

谷村綾子（編集責任者）

a-tanimura@cs.kinran.ac.jp

印刷 株式会社ラクスル